



慶應義塾大学ビジネス・スクール

キーエンス

キーエンスは、センサー・テクノロジーのパイオニアとして「世界初、世界最小」の製品を常に開発・提供し、他社の追随を許すことなくトップシェアを維持し、昨今の不況の中でも順調に業績を伸ばしている。10

1990年、設立わずか16年で東証・大証一部上場を果たし、上場初値が当時の日本一を記録、その後も株価は上昇し市場から高い評価を得ている。また、日経優良企業ランキングでは、上場以来常に20位以内を維持している⁽⁷⁾。15

沿革

キーエンスは、資本金306億円、従業員1350名、売上高720億円、経常利益333億円（い、20
ずれも1999年度）を誇る、センサー・テクノロジーのパイオニアの企業である。現在、自己資本比率95.5%、売上高経常利益率46.3%（2000年3月期）の超優良企業である⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

キーエンスは、1974年リード電機として滝崎武光氏により創設され、当初、自動線材切断機や冷凍食品製造の自動化のための電子制御装置を開発した。創設前の1973年に、工場の自動化を進めていた自動車業界向けに、磁気を利用して非接触で物体を検出するセンサーを開発し、その後、高精度位置決めセンサー、近接センサー等次々とファクトリー・オートメーション（FA）分野で利用されるセンサーを開発し事業の基盤を築いた。センサーという言葉は、リード電機が自社製品に使用したことにより一般に使われるようになったものである。このようして経営の基礎が確立されていった。2530

当ケースは日本ユニシス株式会社の行成 敦と、慶應義塾大学大学院経営管理研究科の小林 喜一郎が公表資料をもとにクラス討議の資料として作成したものであり、特定の経営状況の適否を例示しようとするものではない

（2001年4月作成）